

私のおすすめ本

常木淳 日本大学経済学部教授
(財政学、公共経済学)

デミアン ヘルマン・ヘッセ (高橋健二訳)

新潮社 (新潮文庫) 1951年

およそ本というものは、若い頃に読んだ方が良い本と、そうでないものがある。例えば、漱石の草枕とか鷗外の史伝物などは、普通の高中生や大学生が読んでも、あまり面白いものではないのではないだろうか。ヘッセの小説は、青春の文学者たる彼にふさわしく、高校・大学時代に読むにまことにふさわしいものではないかと思う。特に、「デミアン」は若い頃に読んで学ぶところが大きいであろう。今風のいじめ問題から始まる本書は、主人公のエミールをいじめっ子から救ってくれた友人のデミアンに対して、どうやっていじめっ子を退治したのかを尋ねるところから始まる。デミアンは、いじめへの簡潔な対処法をエミールに伝えるが、エミールにはその意味を理解できない。そして、それからエミールの自己形成のためのたゆまぬ努力の過程が描かれ、彼がかつてデミアンの語った答えの本当の意味にたどりついた時に、エミールの青春の物語は完結する。人間が真に一人の大人になってゆくとはどういうことなのか、ヘッセ自身の過酷な精神的体験との闘いを踏まえて書かれた本書には、そのための、汲めども尽きない多くの大切なヒントが隠されている。

学問のすすめ (現代語訳) 福澤諭吉 (斎藤孝訳)

ちくま書房 (ちくま新書) 2009年

福澤諭吉は、近代日本が生んだ最も偉大な思想家である。「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」という人口に膾炙した一文から始まる本書は、全ての人間が平等な権利を持つとする文明社会の理念が、全ての人間それぞれ個人として独立しなくてはならないという厳しい義務の存在を前提としてのみ成立していることを指摘し、人間として独立するためにはどのような学問をどのように学ばなくてはならないのかを伝えることを目的としている。福澤の議論は、そこからさらに広がりを見せ、そもそもなぜ人間は個人として独

立しなくてはならないのかを説いて、人間の自由と社会的義務との関係、個人と政府の関係、国際社会における国家の意味と国民としての責任などの問題へと深まってゆく。その一方で、どのようにして品格ある人間となるか、適切に人生設計をする秘訣、理論と実践とのバランス、円満な対人関係の形成など、ハウツー本的なトピックも満載で、そのいずれもが良く考え抜かれて軽薄に流れるところなどみじんもない。本来、彼一流の名文を原書で読むのが最も望ましいが、文語体に慣れない読者の方は、まずは現代語訳された本書で福澤思想の神髄を学ぶ第一歩としてほしい。

私の幸福論 福田恆存

ちくま書房（ちくま文庫）1998年

戦後日本に屹立する孤高の大思想家、福田恆存の幸福論である。女性誌に連載されたものであるが、福田氏自身が断っているように、女性限定の幸福論ではない。ただ、美醜（ルックス）の問題から入るのは、やはり女性誌の読者層への配慮からだろうか。そして、女性に限らずすべての人に美醜の差があり、それによって生涯の幸不幸が左右されるのは避けがたい真実である、という、誰もがうすうす感じていながら、建前上、口に出さない論点を正面から提示して議論に入る。そこだけを一読すると、筆者も含めて強く反発を感じるところではあるが、福田氏の本意は、事実としてあるものをないかのように目を逸らし心にふたをしている限り、本当の幸福はない、というところにある。事実を事実として認めて、とらわれずに率直に振舞うところから、本当の自由、本来の幸福は生まれる。宿命と自由、真の教養といった極めて重い問題に対する深く周到な考察を経て、再び、愛、性、結婚、家庭など男女間の問題を論じたのちに到達する結論部を、尽きせぬ感動を持って受け止めて自らの一生の心の糧とするか、それとも、「なんだい、あれこれと理屈をこねた挙句、結局ただの気休めじゃあないか」と言って本を放り投げるかは、もはや読者それぞれが自ら選択すべきことであろう。福田氏自身が言っているように、「究極において、人間は孤独です。愛を口にし、ヒューマニズムを唱えても、誰かが自分に最後までつきあってくれるなどとは思ってはなりません。」